

薬理学Ⅱ

責任者 : 中山 貢一 教授
担当講座(科) : 分子細胞薬理学講座

講義 22.5時間
単位 2単位

学年

2学年 後期

学習方針

基本理念 :

薬理学を理解し、臨床への応用を可能にするためには、その基礎となる化学物理系、生化学、分子生物学、微生物学等の薬学部関連授業科目において修得した知識の活用が必要不可欠である。本講義では、これら授業科目で得られた知識を基礎として、正常、および病的状態にある生体における薬物の薬理作用を、薬物とその受容体結合、細胞内・細胞間情報伝達、および薬物用量と作用の関係(用量-作用曲線)の定量的解析から学ぶことを目的とする。また、神経、循環、消化器系等に作用する薬物の薬理作用を分子から生物個体レベルまで学ぶ。

一般目標 (GIO) :

1. 作用部位に到達した薬物用量と作用により薬効が決まることを理解するために、薬理作用の基本について修得する。
2. 薬理作用の本質を分子から個体レベルまで理解し、薬物の体内動態や薬物治療と関係付けながら修得する。
3. 神経系、循環器系など種々の機能系に作用する薬物に関する基本知識を習得しその作用の検出のための技能、態度を身につける。
4. 身体の病的変化や、生理学的調節を理解するために、薬を応用する知識や技能、態度を修得する。

到達目標 (SBOs) :

1. 薬物の用量と作用の関係を定量的に説明できる。
2. 用量作用関係の応用: 受容体結合の解析、医薬安全性の定量化、薬物相互作用と等作用曲線について説明できる。(☆)
3. 薬物の作用する仕組みについて、受容体などの例を挙げて説明できる。
4. 薬物の作用発現に関連する細胞内、細胞間情報伝達について例を挙げて説明できる。
5. 神経系、循環系など種々の機能系に作用する代表的な薬物について、その薬理作用、機序、主な有害作用について説明できる。
6. 薬物依存性や薬物相互作用について、具体例やそれらの機序を挙げて説明できる。

講義日程

月日	曜	時限	講座(科)名	担当者	内 容
9/9	金	1	分子細胞薬理学講座	中山 貢一 教授	薬理学Ⅱの講義のはじめに
9/16	〃	〃	〃	〃	分子から個体レベルに対する薬物の作用
9/30	〃	〃	〃	〃	薬物用量と作用関係 その1
10/7	〃	〃	〃	〃	薬物用量と作用関係 その2
10/14	〃	〃	〃	〃	薬物受容体を介する細胞内情報伝達 その1
10/21	〃	〃	〃	〃	薬物受容体を介する細胞内情報伝達 その2
10/28	〃	〃	〃	〃	薬理学と薬物動態学及び臨床薬理学
11/4	〃	〃	〃	〃	中枢神経に作用する薬物 その1
11/11	〃	4	〃	〃	中枢神経に作用する薬物 その2
11/18	〃	1	〃	〃	自律神経に作用する薬物 その1
11/25	〃	〃	〃	〃	自律神経に作用する薬物 その2
11/30	水	3	〃	〃	知覚神経・運動神経に作用する薬物
12/9	金	1	〃	〃	循環器系に作用する薬物 その1
12/16	〃	〃	〃	〃	循環器系に作用する薬物 その2
1/6	〃	〃	〃	〃	消化器系や代謝機能に作用する薬物

教科書(教)・参考図書(参)・推奨図書(推)

	書 名	著者名	発行所	発行年
教	New 薬理学 改訂第6版	田中 千賀子 加藤 隆一 編	南江堂 (定価 8,800 円)	2011
参	薬理学マニュアル 改訂4版2刷	高柳一成 他	南山堂 (定価 4,800 円)	2008
参	人体機能生理学 改訂第5版	杉 晴夫 編	南江堂 (定価 10,000 円)	2009

成績評価方法

演習、定期試験、レポート及び出席点を総合的に評価する。